

# 総合的な学習の時間における現地理解教育と自己理解教育

— 人との出会いを通して —

前香港日本人学校中学部 教諭

福島県白河市立東北中学校 教諭 山田 淳 市

キーワード：在外教育施設，総合的な学習の時間，現地理解教育

## 1. はじめに

香港は、香港島、九龍半島、新界、および東シナ海に浮かぶ235の島からなり、陸地面積は1,104km<sup>2</sup>で、東京の半分、中国全土の8700分の1程度しかない。起伏にとんだ山がちな地形で、人々の生活エリアはわずかな平地に限られることが、高層ビルが高密度に建ち並ぶ香港独特の景観を作り出している。

亜熱帯気候に属する香港は高温多湿であり、年間平均気温が約25度と比較的過ごしやすい。5月から9月は比較的雨が多く、強力な台風も通過する。台風の8号警報（シグナル8）が発令されると、ビジネスや交通機関は強制的にストップされる。当然ながら、学校も休校となる。在任中に何度か経験し、校舎が古い中学部は、教室に水たまりができたほどである。

香港の公用語は、英語と広東語の二言語である。最も多く話されているのが中国語の方言である広東語であるが、ビジネスやサービス業では英語も使われている。中国標準語（北京語／マンダリン）は1997年の返還前後を境に急速に普及し、ビジネス用語としての必要性が高まっている。また、香港返還の際に、教育現場では「両文三語」、英語と中国語の読み書きができ、広東語、北京語、英語が話せる、という教育方針のもとに小学校から北京語学習が取り入れられている。

香港日本人学校中学部は、香港島の北側に位置し、周辺部にも多くの学校が建ち並ぶ小高い丘にある。全校生徒は256名（H22.4.15現在）、全学年ともに3クラスの学校である。週2時間英会話の時間を設定しており、英会話教育に力を入れている。また、総合的な学習の時間にも、時間をかけて取り組んでいる。

本生徒たちが国際人として活躍していくためには、生徒一人ひとりが、将来、社会人として自立し、自主的に自分の人生を歩んでいくために必要な能力や態度を培うことが大切である。また、コミュニケーション能力を高めることが大切である。そこで、「自立と共生」を学校テーマとした総合的な学習の時間の取り組みについて紹介する。

## 2. 実践報告

### (1) 第1学年テーマ「学び方を学ぶ『地域（香港・マカオ）を知る』」

#### ① 元朗探検（6月実施）

城市大学の学生とともに、元朗（ユンロン）の名所や旧跡を訪れるフィールドワークを行った。元朗（ユンロン）は新界地区に位置し、歴史ある町並みを残している。5～6名の生徒の班に城市大学生1～2名が同行する形で、各名所・旧跡ではその由来などについて大学生が日本語でガイドをした。見学コースは4コースあり、昔の学校である「二帝書院」、盗賊から村を守るため城壁に囲まれた集落「吉慶園」、長きにわたり生長し家を飲み込んでしまった老榕樹「樹屋」、中国の鄧族にゆかりのある「聚星樓」「鄧氏宗祠」「鄧族文物館」などが主なものである。



元朗探検「吉慶園」

## ② 中文大学專業進修学院との交流（9月実施）

中文大学專業進修学院（以下、中文大学SCSと略す）には日本語学科があり、その学生と交流会を行っている。中文大学SCS日本語学科は、全日制の学校で、日本語と英語、日本の歴史・文化、日系企業の文化などを学んでいる。将来、日系やローカル企業への就職、または、日本留学や香港での大学進学を目指す学生を支援するための課程である。

交流の目的は2つあり、1つ目は日本文化の紹介である。中文大学SCSの生徒は、日本語を学んでいるだけあり日本への関心は非常に高い。日本人学校の生徒は、日本の文化や歴史、興味のあるものなどの中からテーマをひとつ決めて調べ学習を行い、それを英語に翻訳して日本語と英語の両方で発表を行った。香港で生まれた生徒や幼いときから香港で生活している生徒も多く、日本のことをよく知らない生徒もいる。そういう点では、日本について理解を深める良い機会になったともいえる。2つ目は、香港ガイドブック作成のためのインタビューである。自分たちの調べ学習のテーマに沿って、香港人の生の声を聞くのが目的である。

中文大学SCSの学生は、卒業研究で「香港の食」「香港の交通機関」など様々なテーマを設定し、グループごとに卒業研究を行っている。それぞれの研究テーマについて模造紙にまとめたものを提示しながら、生徒に向けてプレゼンテーションを行った。

また、21年度は2年生が交流を行った。香港の教育や生活の知りたいことを質問としてまとめ、中文大学SCSの生徒にアンケート調査を事前に実施した。それと同じ質問を日本人学校の生徒にも実施し、比較してまとめのレポートを作成した。

## ③ 香港オリジナルガイドブックの作成

自分たちだけのガイドブックを作る。それが「香港オリジナルガイドブック」の趣旨である。香港は観光都市であり、ガイドブックも数多くあるが、市販のガイドブックには載っていないような情報を織り交ぜながらガイドブックを作成する。本やインターネットの情報だけでなく、夏休みなどを利用して実際に足を運んで取材したり、インタビューしたりしながら記事を完成させていくように努めた。すべてがオリジナルというわけにはいかなかったが、100ページにわたるオリジナルガイドブックが完成した。

## ④ 宿泊学習（1月実施）

1年生は1月に、中国の珠海市、マカオに2泊3日で宿泊学習を行っている。珠海市とマカオは隣接しており、フェリーを使って約1時間程度の距離にある。この宿泊学習においては、大きく3つのことを行った。

1つ目は、日系企業の見学である。珠海市にあるBrother、Canonの日系企業を見学させていただいた。Brotherではミシン、Canonではデジタルカメラ、レーザープリンタの製造工程を見学した。会社の概要や雇用の実情、製品についての説明など様々な話を聞くことができたが、見学後の質疑応答では生徒から積極的に質問をするなど主体的に取り組む姿が見られた。



Brother ミシン工場見学

2つ目は、学校交流である。珠海市にある広播電子大学日本語学科とマカオの培正中学と交流会を行った。広播電子大学とは、過去に交流歴はなく今回初めて交流を行った。また、培正中学とは長い間交流を続けている。どちらも自己紹介、アイスブレイキングの後にこちらは日本の文化を紹介し、中国、マカオの文化を教えてもらうという「Cultural exchange」を目的に実施した。

3つ目は、マカオ世界遺産見学、マカオ博物館見学である。世界遺産見学は、フィールドワークとして実施し、限られた範囲の中で自分たちの計画に基づいて世界遺産を見学した。その際に、「1人1ガイド」と称し、自分たち

が見学する場所の調べ学習を個々に行い、その場所で担当者がガイドをするという試みを実施した。どの生徒も責任を持って調べ、ガイドをすることで、ただ見て回るよりも効果的であった。

## (2) 第2学年テーマ「体験から学ぶ『日本を知る』」

### ① 修学旅行（12月実施）

修学旅行は3泊4日で実施しており、マレーシアに1泊、シンガポールに2泊の行程である。

マレーシアでは「ホームビジット」がその目玉である。マレーシアの民家を訪問し、民族衣装を着て半日を過ごす。英語を話す人はわずかであり、コミュニケーションの手段はマレーシア語、または、ボディランゲージである。お昼には、ホストファミリーとともに郷土料理であるカレーを手で食したり、伝統のゲームである「チョンカ」をして遊んだりする。その他にもマレーシアでは、王宮見学やパティック製作の体験活動を行った。

シンガポールでは「B&Sプログラム」が目玉である。1班5～6名の班に1～2人の大学生がつき、フィールドワークを行った。その他にもシンガポールでは、シンガポール動物園、国立博物館、セントーサ島などを訪れた。

事前学習として、マレーシア・シンガポールの歴史や文化、食生活、観光名所など、様々な項目を挙げ、それを生徒たちで割り振りをして1冊の本を作り上げた。事前学習としては、効果的な取り組みであり、内容の完成度は高い。また、マレーシア語についても「マレー語講座」と称し、日常会話程度の語学学習をしてから修学旅行に臨んでいる。これについては、マレー系の英語講師が本校に勤務していたので実現できた。

### ② 宣基中学校との交流（2月実施）

香港にある宣基中学校とは長きにわたって交流活動を行っている。1年ごとにホスト校を変え、お互いに学校を行き来しながら交流活動を行っている。22年度は本校がホスト校であり、日本文化を紹介するなどお互いに交流を深めた。

## (3) 第3学年テーマ『自己（自分の将来の姿）を知る』

### ① 香港大学との交流（6月実施）

香港大学は、いわずと知れた香港を代表する大学の1つである。大学進学は狭き門であり、日本よりも受験戦争は過酷であると言っても過言ではない。香港は、学校を卒業するたびに試験があり、その成績で進学できる学校が決定する。そのため、有名校への進学率や偏差値の高い小中学校を目指して、有名幼稚園に入れようとする親は多く、通園に便利な地域までわざわざ引越す親もいる。

現行の教育システムは小学6年、中学3年、高等中学2年、大学予科2年、大学3年のイギリス式の教育制度「6・3・2・2・3」制で行っているが、2012年までに中学3年、高等中学3年（New Senior Secondary）、大学4年の「6・3・3・4」制の完全実施となる。

そんな厳しい勉強に耐えてきた学生たちに大学キャンパスで勉強や大学のこと、香港のことなど、様々な話を聞き交流を深めた。また、大学生と一緒に昼食をとり、キャンパスライフの一部を味わった。

### ② 職場体験（9月実施）

日本で実施している職場体験学習と同様で、本校では2日間の体験学習を実施している。協力いただいているのは日系企業であり、約30の企業が受け入れてくださっている。実際に働くという体験は貴重であり、そこから学ぶことは多い。

## (4) 学校として

### ① MEET THE PROFESSIONAL

本校では、「MEET THE PROFESSIONAL」と称して、ゲストティーチャーをお招きして、お話を聞く機会を数多く設けている。

各学年の総合的な学習の時間のテーマ、ねらいに応じて、ゲストティーチャーは様々である。例えば、今後の生き方を考えるために元高等学校校長、プレゼンテーションのスキルアップのためにスピーチトレーニングのプロフェッショナル、香港理解のために香港に長く住んでいる方、日本文化理解のために着物の着付けのできる方、茶道家、領事館の方、自然保護のために植林活動をしている方、助産師さん、JICAの方など、実際に働いたり、活動したりしている方の生のお話を聞く機会を数多く設定している。

## ② 部活動交流

本校は部活動を行っており、放課後に活動している。サッカー部、バスケットボール部、バドミントン部、卓球部、テニス部、美術部があり、各部とも週3日程度活動している。日本の部活動とは異なり、大会など対外試合がなかったが、国際交流ディレクターの尽力で現地の学校とも交流試合が増加した。

## 3. 成果と課題

- ゲストティーチャーの話は、その専門性もさることながら、生き方指導という面においてもすばらしい話が多く、感想などを見ると生徒一人ひとりの心に深く残っている。
- 様々な人との出会いを大切に、話を聞き、疑問に思ったことを質問するなど、コミュニケーション能力の向上を図ることができた。
- 国際交流ディレクターの存在は大きく、事前準備から関わっていただいたおかげで様々な交流活動等をスムーズに進めることができた。
- 交流している学校は、限定されるのが現状である。教師間の事前打ち合わせが密に行われるためには日本語が不可欠であり、紹介した交流校には日本人、あるいは日本語の話せる現地教師いる学校が多い。いない場合は、英語教師がその役割を担うこととなる。
- 交流校が現地の学校であるので、日本のカリキュラムと異なり交流実施時期の設定が難しい。
- 生徒の英会話能力の個人差は大きい。そのため、日本文化紹介の英訳文などは英会話教師に頼る部分が大きく、かなりの負担をかけた。負担のかからない方策が必要である。

## 4. おわりに

異文化を理解することで、自らのアイデンティティーに気づき、互いを尊重する心を育成することがねらいのひとつであった。総合的な学習の時間を通して、香港の歴史や文化について様々なことを理解することができた。また、日本のことを交流校の学生に説明するにあたり、生徒自身も改めて日本という国を意識しながら調べ、まとめることができた。異国と日本を比べることで、改めて共通点や相違点に気づくとともに、日本のすばらしさを実感できた部分もあるのではないだろうか。

香港の大学生の自己実現を目標とした主体的に学ぶ姿勢はとてもすばらしいものであった。この姿勢は生徒たちにとって良い刺激となった。また、特に日本への関心はとても高いように感じた。中学生どうしで交流することにも大きな意義があるが、大学生との交流は生徒一人ひとりにとって学ぶことが多かったことはいままでもない。

最後に、交流活動においては、交流相手の先生方の綿密な受け入れ準備のおかげで、生徒にとって有益な交流活動を行うことができています。多くの人との出会いは、生徒を確実に成長させていると実感できました。生徒の育成のために関わってくださったすべての方々から心から感謝したい。今後も交流校とのつながりを大切にして、お互いの文化や考え方を学び合う関係でありたいし、様々な人から多くのことを学ぶ人間でありたい。人生は一生勉強なのだから、常に学ぶ心を持ち続けたい。